

近現代の歴史学習における人物（地域素材）の教材開発研究

—「若槻礼次郎」と「福田平治」の教材化と授業実践を通して—

岩田 遵子

Junko IWATA

A Study of Improving the Learning of Modern Japanese History
Based on Local and Historical Figures

— Through the Classes on Reijiro Wakastuki and Heiji Fukuda —

【 要 旨 】

本研究は、近現代の歴史学習に地域の人物を教材化して取り入れることにより、以下の2点を立証しようとするものである。①この時代に対する子どもの学習意欲を高める。②人物の生き方を通して歴史的背景や社会の仕組みを考察し合う授業を実現する。まず最初に、松江市内の中学3年生対象に実施した意識調査から、子どもが興味をもった歴史上の人物や時代、歴史や歴史学習に対する子どもの意識の特徴を明らかにした。次に、人物学習に関する先行研究で指摘されている問題点の改善や、資料の工夫をして島根県に縁のある「若槻礼次郎」と「福田平治」の二人の人物を教材化し、それぞれの授業を実施した。その際に、理解の対象の複線化と話し合い場面の設定をすることで、見方・考え方を深めようとした。その結果、開発した授業の有効性を確認するとともに、実施した2つの授業を比較することにより「身近」の条件を導き出し、さらなる授業の改善方略を提案した。

【キーワード：人物学習 近現代 地域 教材開発 理解型社会科】

I はじめに

社会は常に変化し、子どもを取り巻く環境やニーズも変わってきている。その時代、その時代で子どもに修得させたい「学力」とは何かが問い直され、学校に期待されることは膨らみ続けている。しかし、どの時代も変わらないのは、子どもにとってどのようなかという視点を重視することだと考える。子どもが授業に求めていることは何かを考えた時、第一に「わかる」ということであろう。それがあって、学習する喜びや追究する意欲もわいてくる。そのような思いから、子どもにとって「わかる授業」をすることを基礎・基本の習得ととらえ、日々の授業実践の核として努めてきた。その成果もあってか、3年間授業を担当した学年では県の学力調査で年々成績が上がり、「社会科を（どちらかと言えば）好き」という声も多く聞かれた。しかし、基礎・基本を重視するあまり、教科書の内容を教え込むような

授業になりがちで、その背景や仕組みの理解に到達できず物足りなさを感じている。子どもが歴史学習の醍醐味である謎解きの面白さを実感し、学習に生き生きと取り組むなかで、考える力や表現する力を育てたいという思いも強くある。

新学習指導要領では、歴史的分野の改訂の一つとして近現代の学習の重視を打ち出している。しかし、県の学力調査の結果分析からは近現代の理解の低さが指摘されている。この時代の学習は苦手意識をもたれやすいが、それは社会の仕組みの学習が中心となるので興味をもちにくいことが原因の一つと考える。

先述した問題の改善を図るため、人物学習を一つの手がかりとして考えてみたい。人物学習は、その有効性について多くの研究者が認める一方で、その問題性も指摘されており、それを克服するための提案もされている。筆者は、平成9年度の全国中学校

社会科教育研究大会で、若槻礼次郎を教材化して授業を行った際に、地域に縁のある人物を取り上げることの有効性を実感した。しかし、平成10年度に教育課程が変わり、社会科の授業時数が減ったために、同じように行うことが難しくなっていた。圧縮して実施したこともあるが、平成9年度のように学習を深めるまでは至らなかった。

今年度から新教育課程になり授業時数が増えたことが、もう一度若槻の思いに光を当て教材化したいという気持ちを後押しした。単元構成を3時間程度にし、地域を「島根県」ととらえれば、他の学校でも実施しやすいと考える。また、若槻以外の人物も教材化し、人物学習の単元構成の基本パターンを明示することにより、他の実践にも役立ててもらいたいと考え、「社会福祉事業の父」と言われる福田平治の教材化にも取り組むことにした。そうすることにより、多くの子どもたちが近現代の歴史学習への関心を高め、何かの形で将来に生かしてくれることを期待したい。

II 研究目的と仮説

1 目的

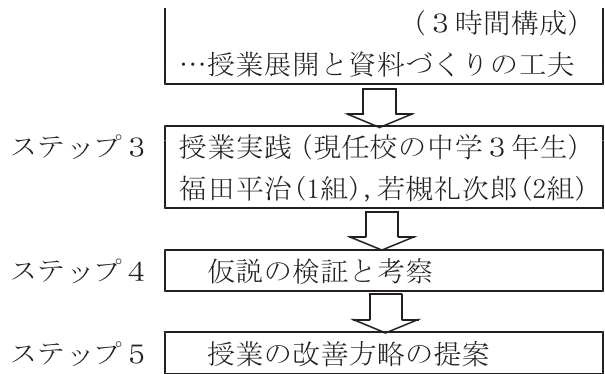
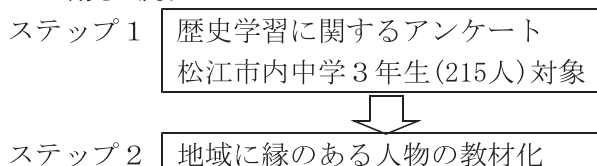
本研究は、近現代の歴史学習に地域の人物を教材化して取り入れることにより、この時代に対する子どもの学習意欲を高め、人物の生き方を通して歴史的背景や社会の仕組みを考察し合う授業を実現することを目的とする。その際に、事前アンケートから明らかになった子どもの特徴と先行研究についての考察を生かして、授業展開や資料づくりを工夫した。

2 仮説

- (1) 地域に縁のある人物を教材化し、視聴覚資料や読み物資料を工夫して提示することは、学習意欲を高めるのに有効である。
- (2) 人物の願いや生き方に共感や疑問を持たせ理解の対象を複線化する授業展開は、歴史的背景や社会の仕組みの理解を深めるのに有効である。
- (3) 話し合い場面を設定することは、自己の考えを広げたり深めたりするのに有効である。

III 研究の方法

1 研究の流れ



2 子どもの特徴

(1) 子どもが興味をもった人物

「歴史上の人物で興味のある人の名前を3人書いてください」の問いには、146人の人物名が挙げられた。その内、10人以上の子どもが挙げたのは、ほとんどが近世以前の人物で、近現代に活躍したのは「伊藤博文」ひとりだった。小学校と中学校の関連で見ると、「坂本龍馬」「伊達政宗」「武田信玄」以外は、小学校学習指導要領に取り上げる人物として例示されている42人に含まれる。

「明治・大正・昭和(近現代)に活躍した人物の名前を書いてください(何人でも)」の問いでは、89人の名前が挙げられた。10人以上の子どもが書いた

表1 10人以上が「興味をもった」と答えた人物

人物名	人数	人物名	人数
織田信長	94	徳川家康	49
坂本龍馬	35	聖徳太子	34
豊臣秀吉	33	卑弥呼	20
伊達政宗	15	伊藤博文	13
紫式部	11	平清盛	11
明智光秀	10	ザビエル	10
武田信玄	10		

表2 10人以上が「近現代で活躍した」と答えた人物

人物名	人数	人物名	人数
伊藤博文	74	板垣退助	39
西郷隆盛	33	野口英世	31
平塚雷鳥	27	岩倉具視	25
ヒトラー	25	原 敬	25
東郷平八郎	24	ローズベルト	24
マッカーサー	22	大久保利通	21
小村寿太郎	19	大隈重信	17
夏目漱石	16	陸奥宗光	15
吉田茂	15	ムッソリーニ	15
明治天皇	14	福沢諭吉	14
田中正造	13	犬養毅	13
ウイルソン	10	スターリン	10
与謝野晶子	10		

た人物の中で9番目に多い「東郷平八郎」は、先述の42人に含まれるが、中学校では教科書の扱いも小さい。このことから小学校の歴史学習が人物への興味の基盤にあると考えられる。

近現代に限定すると子どもは多くの人物を挙げることができたが、全時代を対象とすると印象は薄いということが言える。その原因は、近現代の学習では流れの中で人物の存在を学習するに止まり、その人物の願いや生き様が見えないということが大きいと考えられる。人物の願いや生き様が子どもの心を揺さぶり、それによって子どもは学習に引き込まれていく。逆に考えればそのような授業を展開すれば、子どもはもっとこの時代への関心を高めるだろう。

(2) 子どもが興味をもった時代

「旧石器～昭和の時代の学習のうち、最も興味をもった（もてなかった）のはどの時代ですか。3つに○をしてください」の質問では、他の時代に比べ、「興味をもった」と「興味をもてなかった」の両方で近現代を挙げている子どもが多かった。そして、それぞれの理由に共通する語句としては「戦争」が多かった。戦争の被害と加害の学習はつらい学習にもなるが、国際社会で諸外国と真に良好な関係を築く上で、知らなければならない歴史事象である。しかし、平和や友好のために尽力した人物の教材開発をすれば、人間への信頼を回復する授業が構築でき、この時代への興味を高めることにもなるだろう。

(3) 歴史学習に対する子どもの意識と歴史への興味

歴史上の人物や事象を覚えるのに約60%の子どもが苦手意識をもっていたが、人物学習には約80%の子どもは良い印象をもっていた。また、読み物資料よりも視聴覚資料への期待が大きく、調べ学習や話し合いに対しては、約60%の子どもが好意的な気持ちを示した。半数以上の子どもは、授業以外で歴史に関する読書やテレビ番組の視聴、史跡や遺跡見学を「よくする」または「時々する」と答えた。しかし、歴史を話題にした会話は、友だちより家族とする子どもの方が多かった。このことは、歴史への関心は学校だけで育まれるものではないことを示唆している。

3 地域に縁のある人物の教材化

(1) 人物の選定と単元の位置づけ

本研究では次の観点から「若槻礼次郎」「福田

平治」の2人を選んだ。

- ・地域に縁のある人物で、共感したり疑問をもったりして身近に感じることができる。
- ・人物の願いや生き様がわかる資料（自伝など）や人物をとりまく人々の思いや願いがわかる資料がある。
- ・人物の生き方を追究する中で、時代背景や世の中の仕組みが見える。

近現代の歴史において、人物の評価は定まっていないこともありやりにくさがある。特に、政治家は扱いが難しい。しかし、若槻礼次郎は人物の生き方から世の中の仕組みが見える点で教材化する意味が大きく、通史の中で扱う事例にもなる。一方、福田平治は地方で功績を残しているなど若槻と対照的なところがあり、2つの授業を比較して考察することもできる。歴史学習を終えた後に単元設定をし、福祉という視点で歴史を振り返れば、歴史学習の学び直しになるとともに公民的分野の学習につながり上でも良い教材になると考えた。

(2) 授業づくりの工夫点

① 人物学習に関する先行研究から

戦前から多くの人物が歴史学習において取り上げられており、その人物や取り上げ方は時代によって異なる。大正10年に「日本史」から「国史」に名称が変更されてからは、人物のエピソードや生き方から教訓を子どもに植え付けることが特に重視され、軍国主義教育に利用された。戦後、学校教育が見直され、歴史学習において軽視されていた人物学習は、昭和30年代から再び注目されるようになった。その後学習指導要領における人物学習の比重は次第に重くなり、平成元年度の改訂では具体的な人物名が例として示されるに至り（小学校）、平成20年度の改訂でも引き継がれている。

このような経緯を考えると、人物学習を行うに当たっては、授業者がその有効性ととも問題性について認識した上で、問題点を克服するための手立てをとって授業構成をすることが大事なことだと考える。藤岡氏は、それまでの研究の論点として次の3点を指摘している。

- ・人物を取り上げることが、ややもすると歴史教育を道徳教育にかえてしまいかねない。
- ・偉人や英雄が歴史の創造者であるとみられる英雄史観を教えることになりやすい。
- ・人物を取り上げると、子どもは人物への「好き

・きらい」で反応してしまい、客観的な人物学習にならない。

そして、「十全な形で展開される人物学習の五つの側面」を示した¹⁾。本研究では、藤岡氏の「五つの側面」を取り入れた授業展開と資料づくりを試みた。

次に社会科の方法原理から考えてみよう。現行の学習指導要領のもとでは、主体性の形成と教えた価値に到達するための妥当性から、人物の願いや生き方を追体験して歴史認識を深める「理解型社会科」の授業が多く行われている。藤岡氏は、人物学習を有効な教授方法だとしながらも、科学性を強調し、主観的に「共感」させることは入口であり、最終的に「分析」することが大事であるとして「理解型社会科」を批判している。それに対し、森本氏は主体性を強調し、科学性のために主観を排除しても借り物の主体性に過ぎないと主張する。そして危惧される「価値注入」という問題は、「解釈学的循環」や「対象の複線化」により解決されるとした²⁾。そしてその具体的な授業の姿として、加藤氏の「討論学習³⁾」を評価し、この方法を「理解型社会科」の問題を克服する上で有効であるとしている。ただし、発達段階を考慮した時に中学生には少し難しく、加藤氏が実践したように高校生に適切であろうと述べている。このようなことから、人物学習の問題点の改善の手立てとして、授業の展開に次の2点を取り入れることにした。

- ・理解の対象を複線化する。
- ・討論学習とまではいなくても、解釈学的循環に近づけるような話し合い場面を設定する。

② 授業展開と資料づくりの工夫

先述したようなことから、次のように授業を

組み立て話し合い場面を設定するとともに、資料づくりにも重点を置いた。子どもの心に働きかけ親近感や好奇心を呼び起こし考えさせることができる読み物資料や視覚資料の作成に努め、事実として当時を理解できるような視聴覚資料や新聞記事を探して活用した。

<授業の主な段階> *話し合い場面の設定

○人物との出会い

- ・人物の生い立ちや業績を知る

→願いや思いに迫る(共感)*

- ・問題解決や意志決定場面(選択場面)の追体験→疑問・自分なりの考え

○背景や仕組みの考察*

- ・時代背景や世の中の仕組みを考察する

→異なる対象を(理解の対象の複線化)

→同時代的視点で

○見方・考え方の深化*

- ・人物の生き方から今とこれからを考える

(3) 若槻礼次郎の教材化

① 単元名「若槻礼次郎の生き方から戦争と平和について考えよう」

② 単元の位置づけ

終戦までの学習をした後で設定し、近代の歴史を振り返るとともに、戦後の歴史学習や公民の学習(平和主義、政治)につなげる。

③ 指導計画(3時間構成)

第1時 若槻礼次郎はどのように政治家になり、どんな活躍をしたのだろうか

第2時 若槻礼次郎はなぜ国民の支持を得られなかったのだろうか

第3時 若槻礼次郎の生き方と戦争、平和について話し合おう

④ 単元目標と展開

単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居や視聴覚資料、読み物資料を活用して礼次郎と出合わせ、人物を身近に感じさせて学習への意欲を高める。 ・礼次郎の生き方や願い、苦悩に共感させながら、なぜ国民に支持されなかったのかに疑問を持たせ、当時の世の中を多角的に考察させる。 ・なぜ戦争に向かってしまったのか、戦争を防ぐためにはどうしたらよいかを、自分なりに考えさせ、話し合いを通して、考えを広げたり深めたりさせる。 			
過程	学習場面・主な問い	教師の支援と指導上の留意点	形態	資料等(*自作)
第一時	1 写真を見てどんな人が想像する。 2 紙芝居を視聴して、礼次郎がどのように政治家になったのかを知る。 3 政治家になってからの業績について年表で確認する。 礼次郎はどんな活躍をしたのだろうか	<ul style="list-style-type: none"> ・礼次郎の写真を提示しどんな人物か想像させる。 ・子どもの頃の礼次郎を視覚資料で提示することにより、礼次郎の一生に親近感を持たせる。 ・年表中の業績に線を引かせ、2回総理大臣になったことや、ロンドン会議の全権として海軍軍縮条約に成功したことに着目させる。 	一斉 一斉 一斉	礼次郎の写真 * 紙芝居 * 年表「若槻礼次郎の生涯と世の中の動き」

人物との出会いの段階	<p>4 ロンドン会議や2度目の総理大臣になった時の礼次郎に関する新聞記事から、当時の国民の受け止め方を考える。</p> <p>5 礼次郎が大切にしていた思いは何か、話し合う。 礼次郎が大切にしていたことはどんなことだろう</p> <p>6 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 海軍軍縮条約の調印を歓迎していることに気づかせる。 期待されて総理大臣になり、松江の人々は大変喜んだことに気づかせる。 ワークシートに自分の考えを書かせ、それをもとにグループで話し合わせる(ホワイトボード)。 ロンドン会議やその後の発言より、礼次郎が国民の負担を減らし、国際協調を進めようとしたことに気づかせる。 	<p>一斉</p> <p>個別 班別</p> <p>個別</p>	<p>当時の新聞記事</p> <p>*回顧録や雑賀小での講話の抜粋(ワークシート①)</p> <p>振り返りカード</p>
第二時 背景や仕組みの考察の段階	<p>1 前時の学習を思い起こす。</p> <p>2 礼次郎が総理大臣になった頃は、どんな世の中だったかを確認して整理する。 礼次郎が総理大臣になった頃は、どんな時代だったのだろう</p> <p>3 満州事変から総辞職に追い込まれた経緯と、その後の動きをつかむ。</p> <p>4 礼次郎が国民の支持を得られなかった理由を話し合う。その際に考えた理由の根拠になるもの(事実や資料など)を示せるようにする。 国民はなぜ、礼次郎を支持せず軍部を支持したのだろう</p> <p>5 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 礼次郎が国際協調を大事にしたことを思い起こさせる 礼次郎が総理大臣になった時に満州事変が起こり、15年戦争の始まりになったことを押さえる。 昭和初期の様子をDVDを視聴してつかませる。 国内での経済の混乱と貧困、軍国主義の高まり、満州事変の勃発と満州国の設立、満州への移民 読み物資料を読んで、礼次郎の思いと逆に軍部が動き、国民もそれを支持したことをつかませ、苦悩する礼次郎の姿を浮き彫りにする。 同時代の視座で考えさせる。 根拠を挙げて考え話し合わせる(ホワイトボード)。 話し合いがうまくいかないグループには、下の考えるヒントを示す。 経済状況は? 満州事変の情報は? 日清・日露戦争後の人々の考えは? 中国・朝鮮の人々への見方は? 政治の仕組みは? 次の時間に発表することを告げる。 	<p>一斉</p> <p>一斉</p> <p>一斉</p> <p>個別 班別</p> <p>個別</p>	<p>*年表「若槻礼次郎の生涯と世の中の動き」 DVD「昭和初期の日本」 *読み物資料「若槻礼次郎の苦悩と平和への願い(一)」 当時の新聞記事ワークシート②</p> <p>振り返りカード</p>
第三時 見方・考え方の深化の段階	<p>1 前時の学習を思い起こす。</p> <p>2 国民が礼次郎を支持せず、軍部を支持した理由とそう考えた根拠を発表する。</p> <p>3 満州事変後の世界の動きと、礼次郎のしたことを知る。 総理大臣を辞めた後、礼次郎はどうしたのだろう</p> <p>4 礼次郎の生き方や、これまでの学習を参考にして、戦争にならないようにするためにはどうしたよいか話し合う。 今後、どうすれば戦争に向かわずにすむのだろう</p> <p>5 礼次郎が生きていたら今の時代をどう見ている想像する。</p> <p>6 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> グループごとに発表させる。 数名の生徒に発表の内容を整理させる。 戦前、戦中と戦争に反対する姿勢を貫いたが、日本は戦争拡大の道を進んでいったことを資料から読み取らせる。 板書したキーワードを参考にして、今後、平和を守るためにはどうすればよいかを、国民の立場で話し合わせる(ホワイトボード)。 グループごとに発表させる。 礼次郎が生きていたら、今の時代をどう見ているだろうと投げかけ、現在に残る礼次郎に縁のある物を提示して、公民の学習につなげる。 	<p>一斉 班別 一斉</p> <p>一斉</p> <p>班別</p> <p>一斉</p> <p>個別</p>	<p>*読み物資料「若槻礼次郎の苦悩と平和への願い(二)」 ワークシート③</p> <p>嫁が島の写真</p> <p>振り返りカード</p>

(4) 福田平治の教材化

① 単元名 「福田平治の生き方から福祉について考えよう」

② 単元の位置づけ

歴史学習の最後に、福祉という視点で歴史を概観し、公民の学習(生存権、社会保障制度)につなげる。

③ 指導計画(3時間構成)

第1時 福田平治はどういう時代に生き、何をしたのだろう

第2時 福田平治の生きた時代と他の時代を比べてみよう

第3時 福田平治の生き方とこれからの時代の福祉について話し合おう

④ 単元目標と展開

単元目標	<ul style="list-style-type: none"> 写真や視聴覚資料，読み物資料を活用して平治と出合わせ，人物を身近に感じさせて学習への意欲を高める。 平治の生き方や願い，苦悩に共感させながら，なぜ政府は平治を助けなかったのかに疑問をもたせ，当時の世の中を他の時代と比べながら考察させる。 日本の福祉を振り返り，これからの福祉のあり方を話し合せて，考えを広げたり深めたりさせる。 			
過程	学習場面・主な問い	教師の支援と指導上の留意点	形態	資料等（*自作）
<p>第一時</p> <p>人物との出会いの段階</p>	<p>1 写真を見てどんな場面か想像する。</p> <p>2 DVDを視聴して，感想を発表する。</p> <p>3 読み物資料をもとに，平治が育児院を開くと決意した理由を話し合う。</p> <p>平治は，なぜ育児院を始めたのだろう</p> <p>4 平治の業績を整理し，恵まれない子ども達や困った人を助ける福祉事業やボランティアの先駆けとなったことを知る。</p> <p>平治は，他にどんなことをしたのだろう</p> <p>5 学習を振り返り，自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 福田平治との出会いの場面なので，興味を喚起するような写真を提示する。 平治の生涯の概要と生きた時代の様子をつかませるためにDVDを視聴させる。 ワークシートに自分の考えを書かせ，それをもとにグループで話し合わせる（ホワイトボード）。 子どもの頃の目の見えない老人と少年との出会い，祖母の存在，公的支援の仕組みがないことから，自分がやろうと決意したことに気づかせる。 読み物資料中の，老人ホームや盲啞学校の設立，歳末慰安運動の実施など，平治が行ったところに線を引かせ，広く社会福祉に努めたことを押さえる。 現在に残っている建物等の写真を提示し，現代とのつながりを印象づける。 	<p>一斉</p> <p>一斉</p> <p>個別 班別</p> <p>一斉</p> <p>個別</p>	<p>子ども達と体操する平治の写真</p> <p>DVD「先人の足跡・福田平治」</p> <p>*読み物資料「福田平治の歩んだ道」</p> <p>ワークシート①</p> <p>愛隣館，県立松江盲学校の写真 振り返りカード</p>
<p>第二時</p> <p>背景や仕組みの考察の段階</p>	<p>1 前時の学習を思い起こす。</p> <p>2 平治が助けを求めたのに，なぜ政府が断ったのか疑問をもち，資料をもとに考える。</p> <p>政府は，なぜ平治を助けなかったのだろう</p> <p>3 政府が福祉に力を入れるようになったのはいつからか，日本の福祉の流れについて振り返り，時代による特色を大まかにつかむ。</p> <p>4 平治が生きた時代はどんな時代か，話し合せて発表する。</p> <p>平治が生きた時代は，どんな時代だろう</p> <p>5 学習を振り返り，自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平治の生涯を思い起こし，政府による福祉事業が行われていなかったことに改めて注目させる。 年表から，政府は産業を発展させ，外国との関係において力をつけることを優先したことに気づかせる。 資料中の福祉のイメージグラフを見て，公助，共助，自助のどれを示すか予想させる。 近世までは，仏教やキリスト教などの宗教による慈善活動が福祉の中心で，本格的に公的機関が福祉事業に取り組んだのは戦後であることに気づかせる。 「〇〇な時代」というように大まかな時代のイメージをワークシートに書かせ，それをもとに話し合わせる（ホワイトボード）。 現在の福祉制度の基盤ができたことをつかませる。 	<p>一斉</p> <p>一斉</p> <p>個別</p> <p>一斉</p> <p>個別 班別</p> <p>個別</p>	<p>平治と子ども達との写真</p> <p>*年表「福田平治の生涯と世の中動き」</p> <p>ワークシート②</p> <p>*日本の福祉の年表とイメージグラフ</p> <p>人物カード（聖徳太子，ザビエル，行基）</p> <p>ワークシート②</p> <p>振り返りカード</p>
<p>第三時</p> <p>見方・考え方の深化の</p>	<p>1 前時の学習を振り返り，戦後，社会福祉の仕組みが整っていったことを思い起こす。</p> <p>2 今の時代は，困った状況になったら，政府からいろいろな援助を受けられることを知る。</p> <p>3 今の時代に対する平治の気持ちを想像することにより，公助が大きくなって良かった点と現代の問題点を考える。</p> <p>平治が生きていたら，今の時代をどう思うだろう</p> <p>4 これからの福祉のバランスはどうしたらよいか，平治の生き方を思い起こして考え，話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 日本国憲法第25条を読んで，社会福祉や社会保障を国の責務としたことを押さえる。 病気になったら，年をとったら，働けなくなったら，障がいがあったら等具体的に考えさせる。 肯定的な意見を出させた後，問題点を示唆する資料を提示し，揺さぶりをかける。 地域の結びつきの疎遠化や財政圧迫など，新しい問題が起こっていることに気づかせる。 黒板に書いた「公助」「共助」「自助」の内，最も力を入れるべきだと思う所に自分の名前を書いたカードを掲示させる。 	<p>一斉</p> <p>一斉</p> <p>一斉</p> <p>個別</p>	<p>憲法25条条文</p> <p>最近の新聞記事（児童虐待件数増加，財政圧迫）</p> <p>*日本の福祉の年表とイメージグラフ</p>

段階	これからの時代の福祉は公助と共助、自助のどれに力を入れるべきだろう	<ul style="list-style-type: none"> グループで話し合わせ（ホワイトボード）、グループごとに発表させる。 社会福祉や社会保障について詳しく公民で学ぶことを伝え、公民の学習につながりをもたせる。 	班別	ワークシート③
	5 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。		個別	振り返りカード

IV 研究の実際

2人の人物を教材化した授業を、10～11月に勤務校の3年生（1組24人、2組24人）対象に1クラスずつ実施した。既に6月に歴史の授業を終え、公民の学習を進めている途中で単元を組み込んだので、本来の単元の位置づけとは異なる。以下は、授業の振り返りカード（図4参照）の自己評価（3件法）をグラフ化したものと生徒の感想である。

月日	学習の計画	自己評価	できた	できていた	できていなかった
10/31	若槻礼次郎の業績（栄光）	ア 礼次郎という人物や当時の世の中に興味を持つことができた。	4%	33%	63%
		イ 礼次郎の業績や願いを自分なりに理解することができた。	0%	29%	71%
11/1	若槻礼次郎の苦悩	ウ 当時の世の中や国民の気持ちを理解しようとした。	0%	17%	83%
		エ 積極的に話し合いに参加し、自分なりの考えを持つことができた。	8%	42%	50%
11/2	若槻礼次郎の生きた方からこの社会	オ これまでの学習を振り返って自分なりの考えを持つことができた。	13%	0%	87%
		カ 話し合いを通して、自分の考えを深めたり広げたりできた。	13%	8%	79%

月日	学習の計画	自己評価	できた	できていた	できていなかった
10/31	福田平治の業績	ア 福田平治という人物や当時の世の中に興味を持つことができた。	5%	36%	59%
		イ 福田平治の業績や願いを自分なりに理解することができた。	0%	41%	59%
11/1	福田平治の生きた時代	ウ 当時の世の中や日本の福祉の流れを理解しようとした。	5%	27%	68%
		エ 積極的に話し合いに参加し、自分なりの考えを持つことができた。	0%	41%	59%
11/2	福田平治の生き方とこれからの福祉	オ これまでの学習を振り返って自分なりの考えを持つことができた。	14%	4%	82%
		カ 話し合いを通して、自分の考えを深めたり広げたりできた。	5%	18%	77%

図1 振り返りカードの自己評価 ■ できた ■ できていた ■ できていなかった

自分にとって平和が当たり前なのですが、若槻礼次郎さんの時代には、平和は本当に尊いものだったのだらうと思います。大戦を終え、平和が訪れた今だからこそ若槻さんの意思を心にとめ、核や紛争と言った社会的問題に取り組んでいくべきだと思いました。戦争、震災などで人々の心が不安定になっていた時代に、リーダーとして国を支えた若槻さんの話を聞いて、今の時代不況の不安にある国民には若槻さんのようなリーダーが必要ではないかと思いました。

自助、共助、公助はすべて大切だけど、日本は介護が受けられない人がまだまだたくさんいるので、共助はもっと力を入れていかないといけないかなと思いました。僕は、福田平治の生き方や名前を全く知らなかったけど、学習をしていってだんだん福田平治のことがよくわかってきました。福祉活動には、昔は力を入れていないことを知りとてもびっくりしました。3時間という短い時間だったけど、学んだことをこれからの学習に生かしたいです。

V 仮説の検証と考察

1 仮説（1）の検証と考察

地域に縁のある人物を取り上げた授業は、子どもたちの学習意欲を高めることに有効だった。図1で示した振り返りカードの自己評価からも、授業への意欲や満足感のようなものが読みとれる。準備したDVDや写真や紙芝居、新聞記事にも高い関心を示した。「写真、DVDなどの視聴覚資料を使うと興味が高まる」「教科書に載っていない読み物資料を使うと興味が高まる」について、授業前と授業後の意識の変化を尋ねたところ、視聴覚資料については、約70%の子どもが、授業実施後に「授業前より気持ちが強まった（興味が高まった）」と答えた。

一方、読み物資料については課題が残った。授業実施後に「授業前より気持ちが強まった（興味が高まった）」と答えた生徒は約40%に止まった。残りの60%の子どもにとっては、魅力的な資料ではなかったということだろう。資料には写真などを添付し、子どもの興味を引きつける工夫もしたが、提示方法の工夫が不十分だったと考える。

2 仮説（2）の検証と考察

若槻の授業では、満州事変から満州国成立へと拡大路線をたどった当時の世の中の事情を「礼次郎」と「国民」の視点で考察させ、福田の授業では、当時の世の中の状況を「平治」と「政府」の福祉への態度の違いから考察させた。本来の単元の位置づけとは異なり既習の歴史事象の記憶が薄れていたため、特に通史に位置づけた若槻の授業では難しい面もあったが、多くの子どもは時代背景や仕組みを自分なりに理解することができた。

教師が「背景は～です。」「当時の世の中は～でした。」と、説明するやりかただと、子どもは「そうなのか。」と理解はする。しかし、表面的な理解でしかないだろう。そうではなく、自分で考えてとり着いた時代背景や世の中の仕組みの理解は、子どもにとって価値あるものになる。

3 仮説(3)の検証と考察

本研究では、小集団での話し合い場面を毎時間設定し、それぞれの段階での話し合いを深めながら、次第に話し合いのレベルを高めることをねらった。座席の近い子どもでも3～4人のグループを作り、社会科の学習班とした(図2)。平素の授業では一斉の形態が中心だが、子ども達は和やかに話し合いを進め、授業後の振り返りでは「話し合いを通して自分の考えを広げたり深めたりできた」の項目について、2つの授業とも約80%の子どもが「できた」と答え、「できなかった」と答えた子どもは若干名だった(図1参照)。ワークシートやホワイトボードの記述、振り返りカードの感想からも話し合いが考えを広げたり深めたりするのに有効だと実感した。話し合いが成立するための基盤は、社会科の授業だけでなく、学校全体の教育活動に位置づけて取り組むことにより高い効果が期待できる。その上で社会科の授業で配慮すべき点を挙げると次の3点だろう。

第1は、話し合いのテーマ設定である。若槻の単元は、本来は終戦の学習終了後に設定し戦後の学習につなげるという位置づけであるが、今回は既に子どもは戦後の学習を終えていたので、「今後、どうすれば戦争に向かわずにすむか」というテーマにした。しかし、子どもは、「平和に暮らす」「話し合いで解決する」「核兵器をなくす」など、大切ではあるが切実感のない観念的な意見に終始しがちだった。自分のこととして考えさせるには、もっと考えやすいテーマ設定をする必要があった。

第2は、意見の可視化の手立てである。頭の中で考えた見えないものを、見えるようにするという工夫が必要である。また、話し合いでは、まず自分の意見を持つことが重要であり、それをもとに友達の意見とすり合わせをしていく。それらの手立てとして図3のようなワークシートやホワイトボード、名前カードを活用した。ホワイトボードは他の人に考えを「見せる」ために有効ではあ

るが、全員の意見を書くことで満足し議論が深まらないグループもあり課題が残った。

第3は、小集団の作り方である。座席の近い子ども同士グループだったことで、少数意見が生かされない場面があった。福田の授業の第3時で、自助に力を入れるべきと答えた子どもが一人いたのだが、班ごとの発表の場では消えてしまったのだ。同じような考えの子どもでグループを作ることにも考えるべきだった。その上で意見を戦わせると、少数意見が生かされ議論も深まるだろう。一人の場合は教員と一緒に考えるのも一つの方法である。



図2 授業の様子(左:若槻 右:福田)

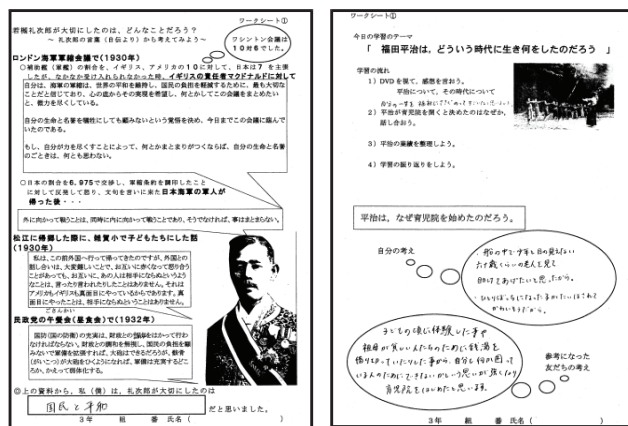


図3 ワークシート①(左:若槻 右:福田)

4 授業後に残ったもの

近現代のイメージについて「重要なー重要でない」の4件法で尋ねたところ、歴史学習終了後(6月)と授業後(11月)で大きな変化があった。近現代を「(どちらかと言えば)重要でない」と答えた子どもが大きく減り(13人から2人)、43人(95%)が「(どちらかと言えば)重要」と答えた。たった3時間の授業ではあったが、多くの子どもに「近現代の歴史は重要なんだ」という意識が強まったことは、今回の教材開発の成果の一つと言えよう。

図4はこの単元で使用した振り返りカードである。このカードの単元終了後の感想を文で分け、

「若槻礼次郎の生き方から戦争と平和について考えよう」 3年(乙)組()番 氏名()			「福田平治の生き方から福祉について考えよう」 3年(乙)組()番 氏名()		
日付	学習の計画	自己評価	日付	学習の計画	自己評価
10/31	若槻礼次郎の業績(実業)	若槻礼次郎という人物の業績や当時の社会について自分なりに理解することができた。	10/31	福田平治の業績	福田平治という人物の業績や当時の社会について自分なりに理解することができた。
11/1	若槻礼次郎の業績(政治)	若槻礼次郎という人物の業績や当時の社会について自分なりに理解することができた。	11/1	福田平治の生き方	福田平治という人物の生き方について自分なりに理解することができた。
11/2	若槻礼次郎の生き方と社会	若槻礼次郎という人物の生き方について自分なりに理解することができた。	11/2	福田平治の生き方と社会	福田平治という人物の生き方について自分なりに理解することができた。

図4 授業の振り返りカード

KJ法の手法を用いて分析してみたところ、2つの授業の共通点と相違点が浮かび上がった。授業を行ったクラスが異なるので単純な比較はできないが、傾向としてとらえることはできるだろう。

共通しているのは、どちらの授業も「授業が楽しかった」「3時間という短い時間でたくさんのが学べた」など、授業を楽しみ授業を通して得るものがあつたという感想が多く、取り上げた人物に対して好意的な感想が多かつたことである。若槻礼次郎や福田平治という平素の授業では学ぶ予定にない「知らなかつた」人物を、学習を進めるにつれて、「初めて知つた」「知つて良かった」「すごい人だ」と、学ぶ価値のある人物としてとらえていった。しかも、人物のことだけでなく当時の時代の理解を深めることもできた。より学習を深めるためには人物に共感するだけでなく批判的に理解することも大切であるが、3時間の授業では難しい。郷土の人物でもあるので、本研究では共感を大事にした。

一方、相違点は、福田の授業では時代背景や福祉に対する自分なりの意見の記述が多く、将来の生き方に踏み込んだ子どももいたのに対して、若槻の授業は人物に関わるものが多く、時代背景の考察や自分の意見を記述した子どもは少なかつたことである。若槻の授業はこれまで述べてきたように、実際の授業は通史で扱えなかつたことや、話し合いのテーマ設定に問題があつたことはあるだろう。また、活躍した分野の違いもあるだろうが、人物がどのくらい子どもにとって「身近」だつたか、ということに因るのではないかと考える。

5 身近とは何か

本研究で地域に縁のある人物を取り上げたの

は、子どもが身近に感じることで学習意欲の向上が期待できると考えたからだ。若槻礼次郎は松江出身だが、成人してからは地域を離れ中央で活躍した。子供達は名前だけ知っている存在だつた。一方、福田平治は鳥取出身だが松江に移住し松江で福祉事業を行った。子どもは名前も知らない存在だつた。この2人のうち、どちらが子どもにとって身近だつたのだろうか。第1時では子どもは2人の人物に同じように興味をもち、気持ちの上で近づくことができたと考えてよいだろう。それは2人が地域に縁があるからなのは確かだ。しかし、第2時から第3時に進むにつれ、子どもと礼次郎との距離は徐々に離れていき、子ども平治との距離は徐々に近づいたようだつた。それは、平治の生涯が子どもの生活に結びついていゝたからではないだろうか。子どもは福祉について学びボランティア活動も行っている。家族が福祉制度を利用している子どももいるだろう。平治が生きた足跡として残る建物を今の時代に見ることもできる。

人物が地域に縁があることは、時間を超えて同じ空間に生活していたことから親しみを生じさせる。大人でも同郷であるとか学校が同じであるというのは、それだけで互いの間の垣根がなくなるように感じるものだ。だが、社会科の授業で教材として活用するには、それだけでは「身近」とは言えない。教材を本当に身近に感じるのは、子どもの経験や生活との関わりがあり、自分のこととして考えられる場合である。

VI 授業の改善方略

福田平治の授業については、中学3年生という発達段階にちょうど良く、概ねこのままで良いと考える。単元の位置づけも、図5のように歴史学習の最後に設定すれば、福祉という視点で既習の歴史学習を振り返り学び直すとともに、公民の学習につながるのに有効であることが明らかになった。歴史と公民が分離している印象をもつ子どもが多いが、本来はそうではない。福田平治の授業はその意味でも意義があるだろう。授業を行う際に最も注意しなければならないのは、道徳の授業にならないようにすることである。私財を投げ打つて人々の幸せのために尽力した人物であるため、道徳的にも尊敬に値する。しかし、それだけに終始しては社会科にならず、社会の仕組みをしっかり押さえた上で社会的意味を考えさせること

が重要である。また、第3時の話し合いのグループは同じ考えの子ども同士で作り、グループ間で意見を戦わせるとより議論が深まるだろう。

次に若槻礼次郎の授業だが、当時の社会情勢がつかみやすいように通史の中で扱うことが重要だろう。その場合、図6の第1パターンのように、終戦の学習の後に単元を設定し、近代を振り返るとともに戦後学習につなげその先の公民の学習にも関連づけることも可能である。これまでの歴史学習では、戦前と戦後で流れが途絶えてしまうような感じがあった。そこで、終戦の学習後に若槻の学習を通して近代を学び直し、戦後学習につなげるのは意味がある。しかし、話し合うテーマを子どもがもっと考えやすいように設定する必要がある。例えば、「若槻礼次郎のしたことは無駄だったのだろうか」と社会的意味を問い、「無駄だった」「無駄ではなかった」のどちらかを選択させて議論させるとよい。その際に、今回の福田平治の授業で行ったように名前カードを黒板に掲示させて可視化すれば、クラス全体で問題を共有し議論を深めることができる。さらに議論の中で、自然に戦争や平和についての考えることにもなるだろう。

図6の第2パターンは、単元の位置づけと組み方を大幅に変えた例である。満州事変勃発の学習の際に、若槻という人物と出合わせ、その思いを考えさせる。そして終戦の学習後に、戦中戦後の若槻の考えや行動を知らせて、戦後の民主主義や平和主義の学習につなげるという案である。敗戦の焼け跡から民主主義国家として生まれ変わり急速に復興が進んだ日本であるが、それはいろいろな分野で地道な努力をした人たちの存在があっ

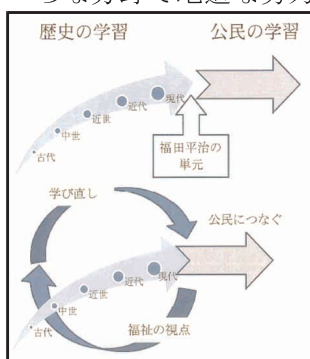


図5 福田の単元の位置づけ

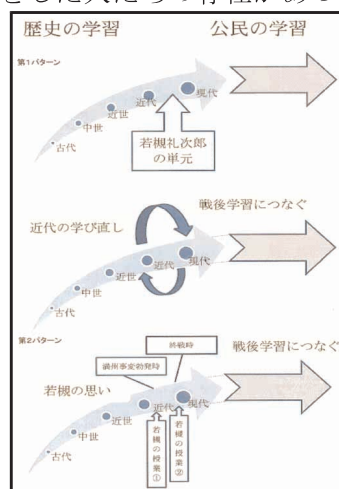


図6 若槻の単元の位置づけ

たからできたことだろう。その一人として取り上げる方法もあると考える。

VII おわりに

本研究の目的は、地域に縁のある人物を教材化して近現代の歴史学習に取り入れることにより、子どもの学習意欲を高めるとともに、歴史的背景や社会の仕組みを考察し合う授業を実現することにあった。開発した授業を勤務校の中学3年生対象に実施することにより、冒頭に挙げた仮説を立証することができた。加えて、2つの授業実践の比較から「身近」の条件を導き出し、人物が地域出身であるということよりも、子どもの生活や経験と関わりがあることで、より学習意欲を高めることが明らかになった。授業実践をもとに、さらなる改善方略を提案することもできた。

今後の課題としては、次の2点が挙げられる。

- ・本研究で示した単元の改善方略に沿った授業を実践し、その有効性を確認する。
- ・子どもに「身近」に感じさせる工夫をして他の人物の教材化にも努める。特に教科書では扱われることが少ない女性の教材開発に努めたい。

歴史で注目を集めるのは一部の人達だが、実際に歴史を創り上げてきたのは私たち庶民（民衆）であり、これからもそうである。だからこそ学ぶことに意味がある。また、事実の一つであるはずだが解釈は様々で、立場を変えるといろいろな見方ができる。だからこそ面白い。教科書を大切にしながらも、固定観念に縛られず、子どもと一緒に歴史の面白さを実感できるような歴史学習の実践を今後も心掛けようと思う。本研究は、筆者にとってその道筋を示すものになった。

【謝辞】

本論文の作成にあたり、熱心に御指導いただいた森本直人先生をはじめ、島根大学の関係者の皆様には、研修の場として最善の環境を整えていただきました。また、授業実施校や調査対象学校の皆様には本研究の趣旨を理解し、快く協力いただきました。皆様への心からの感謝の気持ちとお礼を申し上げます。

＜引用・参考文献＞

- 1) 藤岡信勝『社会認識教育論』日本書籍 1991
- 2) 森本直人「『理解』理論による主体的な歴史解釈 力の育成」『社会科学研究』第48号 全国社会科教育学会 1998
- 3) 加藤公明『わくわく論争考える日本史授業 1』地歴社 1995